

エゼキエル書 18章 1-4、25-32 節
フィリピの信徒へ手紙 2章 1-13 節
マタイによる福音書 21章 28-32 節

最近はすっかり秋の様子となってきました。朝夕が、少し寒いくらいです。皆さまどうぞ、コロナのほか、風邪などひきませぬようにお気を付けください。

今回は福音書を中心に学びます。聖書日課はイエス様のたとえ話が続いています。今回は、イエス様と弟子たちが、エルサレムへ入城した後のたとえ話です。つまり、イエス様は、エルサレムの権威者たちに語っています。

たとえ話自体の構造は、非常に単純です。ある父親が、二人の息子にぶどう園の労働を命じるということです。最初に兄のところへ行くと、兄は、いやだと拒否しますが、考え直して働きます。次に弟のところへ行くと、弟は、はいといい返事をしますが、行かないのです。このたとえは、新共同訳が出版されて多くの人が驚いた箇所の一つでした。1955年出版の『聖書 口語訳』と、1987年『聖書 新共同訳』（『聖書協会共同訳』も同じ）とでは、兄と弟が逆になっているからです。

以前の口語訳の部分を見ますと、以下のようになっていました。

29 すると彼は『おとうさん、参ります』と答えたが、行かなかった。30 また弟のところに来て同じように言った。彼は『いやです』と答えたが、あとから心を変えて、出かけた。31 このふたりのうち、どちらが父の望みどおりにしたのか。彼らは言った、「あとの者です」。イエスは言われた、「よく聞きなさい。取税人や遊女は、あなたがたより先に神の国にはいる。

聖書協会共同訳ではこのようになっています。

29 兄は『いやです』と答えたが、後で考え直して出かけた。30 弟のところへも行って、同じことを言うと、弟は『はい、お父さん』と答えたが、出か
けなかった。31 この二人のうち、どちらが父親の望みどおりにしたか。」
彼らが「兄のほうです」と言うと、イエスは言われた。「よく言うておく。
徴税人や娼婦たちのほうが、あなたがたより先に神の国に入る。

下線を引いた部分が違いですが、それはギリシア語原典の違いです。新しい訳は、その方が本来の原典だろう、という判断でそうなったのですが、解釈しやすかったのは、前の訳の方でした。なぜならば、「父」は、主なる神様、「兄」は「祭司長や長老たち」、「弟」は、「徴税人や娼婦」、「祭司長や長老」は律法には応えたがイエス様に従わなかった、「徴税人や娼婦」は律法には応えなかったがイエス様に従ったと解釈できるからです。

現在の聖書では、兄と弟の答えが逆になっていますので、この解釈はできません。しかし、だからこそ、この「兄」「弟」という先入観をなくすと、大切な点が浮かび上がるといえます。つまり、どちらが主なる神様の義を行ったこととなるか、それが最も大切な事柄でだとわかるからです。そして、その判断基準において、バプテスマのヨハネの宣教が関わっていることも、同時に浮かび上がるのです。

「兄」にたとえられている、最初は断ったが、後から命令通りにした人はだれか、それは、徴税人や娼婦たちです。彼らはバプテスマのヨハネの宣教を受け入

れたであろうということは、マタイ福音書の冒頭の物語から想像されます。また、娼婦という言葉は、マタイ福音書では、この箇所ではしか用いられていませんが、徴税人は、イエス様と共に行動する人々ともなりました（マタイ 9:10、10:3、11:19）。それでは、「弟」にたとえられている、返事だけで命令通りにしなかった人はだれか、それは祭司長や長老たちです。バプテスマのヨハネのもとには、大勢の群衆の他、ファリサイ派やサドカイ派の人々も訪れましたが（マタイ 3:7）、そこには祭司長や長老たちという記述はありません。また彼らはバプテスマのヨハネを信じていなかったと、この物語では伝えられています（マタイ 21:25）。しかし、ファリサイ派やサドカイ派の人々も、「ヨハネは、ファリサイ派やサドカイ派の人々が**大勢、洗礼(バプテスマ)を受けに来たのを見て、こう言った。「毒蛇の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、誰が教えたのか」**（マタイ 3:7）とある通りいったん拒絶されます。つまり悔い改めるだけでは駄目だということでしょう。実を結ぶことを求められているのです。結局、福音書の物語全体から見れば、先に触れた解釈と答えは同じなのですが、今の聖書のたとえの方が、大切なのは、「神の義」を結ぶか否かである、それがより鮮明になるのです。

さて、この実を結んだことの結果と言えるのが、イエス様の言葉にある「**あなたがたより先に神の国に入る**」（マタイ 21:31）ということです。この「神の国」という言葉は、マタイ福音書では、「天の国」という言葉の方が多く用いられています。しかし、この個所のように「神の国」という言葉も使われているのです。ことに 6 章 33 節では、イエス様は、群衆と弟子たちに「**何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる**」と語ります。

「神の国」とは、訳を変えれば、「神の王国・支配」ですが、それを実現するための「神の義」、それは人間の義ではなく、主なる神様の求める義です。人間の観点や価値観と一致する場合もあり、またそれを超えている場合もあります。何が神の義であるのか、判断が難しいのですが、その指標となるのが、イエス様が十字架で示された愛です。よって、大切なのは、その愛をそれぞれがどのように受け止めて、具体化するのかということです。

世界中が、聖書の神の支配に入る、そんな表現は少し恐ろしい感覚があります。しかし、それが世界中に神様の愛が満ちますようにという願いであると受け止める時、感覚は変わります。そして、次に課題となるのが、それをどこで具体化するかということです。その第一の場は、教会です。もちろん、中世のように教会だけが豊かになるということではありません。どれほど教会の外で愛の大切さを訴えても、教会の中が殺伐としていては、伝わらないということです。また、それだけではありません。教会の中で愛の実践を考える時、その実践は、外の社会にある様々な結びつきを超えられるからです。

教会は、常に主なる神様の愛を実践し続ける存在です。マタイ福音書を大切にしている教会の自己意識がそうでした。自分たちの集まりが常に途上であることを深く自覚していました。イエス様が愛を示し、そのイエス様を信じているのに、なぜ、途上か、それは、教会は、世界に主なる神様の愛が満ちるまで完成がないからです。その意味では、教会の目標は途方もなく大きく、また遙か未来にしかないのかもしれませんが。しかし、だからこそ教会は尊いのです。わたしたちも、その目標の途上にある一教会として、世界に愛が満ちることを願いながら、歩み続けたいと思います。